

EDUCAUSE2009 参加報告

—EDUCAUSE と EDUCAUSE 2009 年次大会—

学術情報基盤センター長 蛭名 邦禎

1 EDUCAUSE

1.1 EDUCAUSE とは

EDUCAUSE は、米国の NPO 団体で、「情報技術 (IT) を賢明に活用することを通じて高等教育の発展に資する (to advance higher education by promoting the intelligent use of information technology)」ことを目的とし、本部をコロラド州ボルダーに置いています (<http://www.educause.edu/>)。情報交換の拠点であると同時に、高等教育の種々の部門の人々のコミュニティでもあります。博士課程を持つ総合大学からコミュニティ・カレッジまでの広い範囲の校種にわたり、関係する人々も、大学の経営陣、IT 部門、教育開発部門、図書館の司書、教員・研究者など様々な職種にわたっています。法人会員は、2000 以上のカレッジや総合大学などの種々の機関にまたがり、約 200 の企業会員を含んでいます。そこに参加する個人メンバーは 16,500 人以上です (2009 年現在)。各キャンパスや国全体にわたって、高等教育が直面する種々の課題の解決に IT コミュニティとして貢献することにより、活動を活発に継続しています。取り組む課題の範囲も、教育と学習、事業体経営、E-研究や E-学習、IT とリーダーシップの新たな役割、事業体内システム、ポリシー、サイバーセキュリティ、職能開発、認証管理、など多岐にわたっています。また、国際的展開も図っており (<http://www.educause.edu/internationalmember>)、2009 年時点で、日本から 8 大学が加盟しています (北海道情報大、法政大、熊本大、京都大、九州大、名古屋大、放送大、大阪大)。

1.2 EDUCAUSE の活動

EDUCAUSE の活動の柱として、応用研究センター (ECAR)、学習イニシアティブ部 (ELI)、ポリシー分析、専門能力開発などがあります。以下、これらについて、簡単に説明します。

1.2.1 応用研究センター (EDUCAUSE CENTER FOR APPLIED RESEARCH)

EDUCAUSE には、高等教育における指導者が必要とする IT の動向を研究し、報告、要約、分析を提行う **応用研究センター ECAR** (www.educause.edu/ecar) があります。研究によって得られた知見について議論するシンポジウムを毎年実施しており、学术界、産業界、シンクタンクなどから参加者があります (www.educause.edu/ecar/symposia)。その研究成果は、毎年 *Burton Research Studies*, *Research Bulletins*, *Occasional Papers*, *ECAR Events* などを通じて公表されています。2009 年の研究テーマとして、以下のようなものがあります。

- 広く伝える：高等教育におけるメッセージングとコミュニケーション
- もう一つの IT 資源戦略：キャンパスからクラウドへ
- 学生と情報技術に関する ECAR 研究 2009
- 高等教育における機関データ管理

1.2.2 学習イニシアティブ (EDUCAUSE LEARNING INITIATIVE)

学習イニシアティブ ELI (www.educause.edu/eli) は、IT イノベーションを通じた学習の進化に資する機関や組織のコミュニティであり、学習者、学習原理、学習実践、学習技術などに焦点を当て、教育と学習に関する専門家が、学び (learn)、先導し (lead)、協同し (collaborate)、共有する (share) 場を提供することを目指しています。

ELI が提供する Toolbox には、新しい技術を学ぶための学習会を実施したり学生へのアンケートを実施するための Discovery Tools、掘り下げた内容を解説した White Papers、向こう 5 年間で大学における教育、学習、創造的探究に影響を及ぼすと予測される新技術を調査し紹介する Horizon Report (New Media Consortium との共同プロジェクト)、その他の参考資料などがあります。この ELI のコミュニティでは、年次大会 (www.educause.edu/eli_annual)、分科会 (www.educause.edu/eli_sessions)、その他の Web セミナー (Webinar) や通常のセミナーを開催しています。また、挑戦的な課題を取り上げる**教育と学習のトップチャレンジ・プロジェクト** (www.educause.edu/eli_challenges) を実施しています。

1.2.3 ポリシー分析と支援活動

EDUCAUSE では、国、州、キャンパスなど、それぞれのレベルで高等教育の IT 政策策定に役立つ信頼できる情報の収集を行い、IT 政策決定者への情報提供や助言、あるいは、キャンパスのセキュリティとネットワーク構築への支援なども行っています (www.educause.edu/Resources/Policy)。また、Cybersecurity Initiative (www.educause.edu/cybersecurity) を通じて、高等教育情報セキュリティ協議会、研究・教育ネットワーク情報共有・分析センター (REN-ISAC)、情報セキュリティ専門家の年次大会 (www.educause.edu/securityconference) なども開催しています。

1.2.4 職能開発 (EDUCAUSE PROFESSIONAL DEVELOPMENT)

EDUCAUSE ではまた、人材育成の一環として、専門能力開発の種々の取り組みを行っています。そのための種々の集会や専門能力開発に関する会議 (www.educause.edu/conference)、特定テーマの分科会 (www.educause.edu/conference/enterprise, etc)、経営能力とリーダーシップ育成事業 (www.educause.edu/pd) などを実施しています。

1.3 EDUCAUSE コアデータ・サービス

EDUCAUSE の主要な活動に、コアデータ・サービス (<http://net.educause.edu/coredata/>) があります。これは、キャンパスの IT 環境や取組状況について、メンバー機関に対して包括的な調査を行い、集約、分析して、各キャンパスにおける IT に関するベンチマーク、企画、意思決定に資するもので、調査、データベース提供、年次報告書発行の 3 要素からなっています。

ウェブによる調査 (Web-based survey) ウェブ入力によってデータを収集します。

ウェブによるデータベース提供 (Web-based database service) 集積されたデータベースにアクセスし、情報を加工・抽出することができます (データを提供した機関のみ利用可)。

年次調査報告書 (Annual survey summary report) 集積したデータを要約し、毎年公表しています。

2008 summary report (<http://net.educause.edu/apps/coredata/reports/2008/>)

1.4 出版

出版も、EDUCAUSE の重要な活動です。定期刊行物などによって種々の情報を提供しています (<http://www.educause.edu/resources>)。高等教育機関における情報資源の管理と利用に関する研究や事例報告を採択する査読付きオンライン・ジャーナルである EDUCAUSE Quaterly (EQ) (<http://www.educause.edu/eq>)、高等教育の IT コミュニティ向けの雑誌である EDUCAUSE Review (ER) (<http://www.educause.edu/er>) を定期的に発刊しています。ER は、印刷物 (22,000 部) とオンライン (毎月 50,000 回アクセス, 250,000 超のページビュー) の両方で発行しています。取り上げられた話題のうち、最近 10 年で最も関心の高かったものとして、以下のものが上げられています。 (<http://www.educause.edu/EDUCAUSE+Review/EDUCAUSEReviewMagazineVolume44/RecommendedResourcesfortheTopT/185231>)

1. IT への資金配分
2. 経営・ERP (Enterprise Resource Planning) 情報システム
3. セキュリティ
4. インフラ・サイバーインフラ
5. IT を用いた教育と学習
6. 認証・アクセス管理
7. 統治, 組織, リーダーシップ
8. 災害からの復旧・業務継続
9. 機敏性, 適応性, 応答性
10. 学習管理システム (LMS)

また、高等教育に関する種々の話題をポッドキャスト (Podcasts) で提供しています。扱われているテーマとして、リーダーシップ, ポリシーと法, 教育と学習, 新規技術, オープンソース, 研究用計算, サイバーインフラ, デジタル図書館, などがあります (<http://www.educause.edu/podcasts>)。

他にも、書籍の他、次のような種々の形態と内容の情報を提供しています。Current Issues, Electronic Newsletters, Executive Resources, Monographs and Reports, Pocket Guide to Higher Ed, Student Guide to IT, EDUCAUSE Style Guide (<http://www.educause.edu/publications>)

2 年次大会と EDUCAUSE 2009

2.1 年次大会

EDUCAUSE 年次大会は、「専門家能力開発の機会 (professional development opportunities)」 (<http://www.educause.edu/pd>) の一つと位置付けられています。ここで専門家とは、IT 技術者だけでなく、大学の経営者 (学長, 理事, 経営スタッフ), 事務職員, 技術職員, 図書館職員, 各種専門家, 教員など、広い範囲の職種が含まれます。このため 4 つの目的が設定されています。

1. IT を機関 (大学等) にとって役立つものにする活動を手助けする
2. 仕事をよりよく行うための戦略と解決方策を示す
3. 同じ職種の人々が機関を超えて出会い, 協働する機会を与える
4. 専門家として能力を高める方法を提供する

この目的のため、EDUCAUSE ではキャリア支援や種々の会合とドキュメントを用意しています。

Career Planning メンター情報キット/ 経営・リーダーシップ習熟の機会/ 求人紹介/ Jane N. Ryland
基金/ ボランティア機会

Events 年次大会/ テーマ別文科会/ 地域大会/ 国際集会/ 高等教育 IT イベント・カレンダー

Resources *Cultivating Careers* (<http://www.educause.edu/cultivatingcareers>)/ *Campus
Team Facilitator Kit* (http://www.educause.edu/wiki/Team_Facilitator_Kit)

2.2 2009 年 年次大会

2009 年の EDUCAUSE 年次大会 (EDUCAUSE 2009) は、コロラド州デンバーで 11 月 2 日から 6 日にかけて開催されました (<http://www.educause.edu/E2009>)。 “THE BEST THINKING IN HIGHER ED IT” を標語として、5000 人を超える参加者があり、日本からも 20 大学、3 企業から約 50 名が参加しました。 3 つの基調講演 (General Sessions), 10 の主要講演 (Featured Sessions), 200 を超える一般講演の他、ショートトーク (Lightning Rounds), 小グループでの情報交換 (Birds-of-a-Feather Sessions), ラウンドテーブル (Discussion Sessions), ポスターセッション (Community Showcases), セミナー, ワークショップ, それに 300 近い企業などの展示ブース, デモ, などが行われました。

講演などは、次の掲げる 8 つの「トラック」に分類されています。リストの各項目の括弧の中は、それぞれのトラックに分類される講演数を表します。

- Client Services (11)
- Emerging Technologies (7)
- Enterprise Systems (22)
- Leadership and Management (30)
- Library and Digital Content (7)
- Networking and Infrastructure (14)
- Security and Privacy (13)
- Teaching and Learning (31)

基調講演は、5000 人が収容できる大ホールで、3 日に分けて行われました。最初の日は、*Good to Great* (邦訳：『ビジョナリーカンパニー 2』) の著者 Jim Collins による *Good to Great and the Social Sectors* という講演で、『ビジョナリーカンパニー』の議論が、企業だけでなく学校や NPO などの種々の社会セクターにも適用できるという内容でした。2 日目は、『CODE』の著者であるハーバード大学の法学者 Lawrence Lessig による *It Is About Time: Getting Our Values Around Copyright Right* という講演でした。現在の著作権制度のもとでは、大部分の貴重な著作物が将来利用されずに立ち枯れてしまうという危機感を述べ、それを活用するための制度改善や技術的なアーキテクチャの必要性を力説し、Creative Commons の提唱者の面目躍如の講演で、終了後しばらくスタンディングオベーションが続きました。最終日の基調講演は、英国 Open University の学長を務めた Brenda Gouley による *Dancing with History: A Cautionary Tale* というタイトルで、大学の組織面から、自身の経験に裏打ちされた講演でした。

その他の主な講演のタイトルを、プログラムから抜き書いておきます。

- 20th- and 21st-Century Climate Change: Computer Modeling, Societal Impacts, and Environmental Justice
- Cloud Computing: Hype or Hope?
- Initiatives from the NSF's DataNet Program: DataONE and the Data Conservancy
- Disrespectful and Time-Wasting, or Engaged and Transformative? The Mile-High Twitter Debate
- "Print"
- Blackboard, Moodle, and Sakai
- The Changing Role of the CIO
- Lessons from the United Kingdom's Experience with Federated Access Management
- Looking Back, Looking Forward: Trying to Use 48 Years in Academic IT to Predict Our IT Future
- Connections: Stories and Dreams of Federated Identity
- Cyberinfrastructure in a Carbon-Constrained World
- Creating a Global Community: Knowledge Given, Knowledge Gained Online
- Cloud Computing: Services, Economics, and Impacts

3 全体を通じた感想

EDUCAUSE は「学術」団体ではありません。「高等教育」を、その基盤・資金、管理運営・意思決定、インフラの整備、教育・学習の内容と方法、職員の人材育成、機関を超えた協働など、それを効果的に進めるのに必要なあらゆる側面について、調査研究し、情報交換し、また人的な交流をする場となっています。ピア・レビュー誌である EDUCAUSE Quarterly にしても、学術誌というよりは、大学の経営者、事務職員などの職業研究者でない実践者からの投稿も広く受け付けつつ、それを単なる事例報告にとどめずに、説得的で客観的な議論を要求した論文誌として発刊されています。

EDUCAUSE のキーワードは、“Higher Education IT”であり、この言葉を多くのセッションで耳にしました。これには、「高等教育における IT の活用」という面と「IT 社会における高等教育のあり方」という面があり、それらは密接に絡み合っているのだと感じました。21 世紀に入って、社会における高等教育の役割の変容と、社会における IT の爆発的普及は、双方向に絡み合っており、種々の課題を生み出しています。これは、Martin Trow の言う、大学の大量化の 3 段階「エリート」⇒「マス」⇒「ユニバーサル」におけるユニバーサルのフェーズで、高等教育の質を落とさずに乗り切れることは、IT の十分な活用なしにはありえないということではないでしょうか。現代における種々の社会的・国際的な問題を解決していける人材の輩出には、どうしてもそれが必要なのです。現在生み出されているこの新しい課題を解決することが、EDUCAUSE の真のミッションなのかもしれません。

このことともおそらく関係するのですが、EDUCAUSE 運営関係者の“collaboration”への熱意には感嘆します。大会自身が、参加者に対する暖かい歓迎の気風で満ち溢れていると感じました。高等教育機関同士が足を引っ張り合っているときではなく、資源、知識、ノウハウ、環境などあらゆる面での機関間の協力関係が重要になるということ強く信じているように見えます。また、それもアメリカ国内に留まらず、多くの国の人々に対しても開放的であることに感銘を受けました。